

## 優秀賞

### わたしの小さなゆう気

鹿児島県 鹿児島大学教育学部附属小学校 二年 石原佳歩

1年生の3がっきがはじまったころの、かえりのバスでのことでした。

バスには、上きゅう生やかいものぶくろをさげた人、赤ちゃんをだっこしたお母さんがのっけていて、いつもよりこんでいました。

わたしのおりるバスでいの一つ前になったので、チャイムをおしました。そして、なにげなくかおをあげたら、つうろに小さなかわいいくつのかたほうがおちているのに気づきました。そういえば、さっき二つまえのバスでい、わたしの三才の妹より小さな赤ちゃんをだっこしたお母さんがおりていったのを思い出しました。

(ああ、あのときだいていた赤ちゃんの、くつのかたほうかぬげたのかもしれない。きっとそうだ。)と、かわいそうに思いました。

わたしは、つぎのバスでいおりなければなりません。あの赤ちゃんに、くつがもどるほうほうはないのかなと、かんがえました。

(そうだ。ゆう気をだしてみよう。)と、思ったとき、バスがとまりました。わたしはいそぎ足で、つうろの前にすすみました。おちているくつをすぐひろって、

「あのう、このちいさなくつがかたほうおちていました。どうしましょうか。」

と、ドキドキしながらわたしました。つぎつぎにおりる人がいるのに、うんてん手さんは、

「ありがとね、あずかっておくね。」

やさしくそういってくれました。わたしは、ゆう気をだしてよかったとほっとしました。

「あずかっておくね」。そのことばで、あの小さなくつは、きっと赤ちゃんのところへもどれるだろうと思いました。わたしは、なんだか心がぱっとあかるくなって、うちまでスキップしてかえりたいほど、うれしい気もちになりました。

あの日から、

(あのくつどうなったかな。赤ちゃんにとどいて、おにわであそんでいるといいのになあ。)

といつもそうぞうしました。お母さんに、わたしの気もちをいうと、

「かほのていきけんをつくってもらいたいから、バスのじむしょまでいってみようか。」

と、やくそくしてくれました。

はる休みに入ってすぐ、お母さんがつれていってくれました。わたしのていきけんをつくったあと、あの日の赤ちゃんのかたほうのくつのことをたずねました。

「ああ、赤ちゃんのかわいいくつね。でんわがあったので、じゅうしょをきいて、おくってあげましたよ。ひろってくれたのは、あなただったのね。ありがとう。」

それをきいて、あのときの赤ちゃんが、りょうほうそろったくつをはいて、おにわをあるきまわっているようすがうかんできて、うれしきでいっぱいになりました。

わたしは、これからもこまっている人がいたら、わたしの小さなゆう気を出して、力をかしてあげたいと思います。